

第二輯 巨大地震の衝撃と破壊

論文 第二

神父マノエル・ポルタルの震災詳説 その一

―聖霊修道院の全壊―

第一節 聖霊修道院 聖職者と居住者の受難

リスボン大地震の被災証言のなかでもっとも大部で詳細であるのは、おそらくオラトリオ会の神父マノエル・ポルタルの記録であろう。同じ修道会に属するペレイラ・デ・フィゲイエイレドの報告は、前節で検討しように一般的・総括的文書と考えられるが、ポルタルの著作『史話 王都リスボンの壊滅史話』では主として執筆者自身の体験と周囲の被災状況がきわめて精細に語られる。

一七五六年に公にされたこの著作は、残念ながら現在入手できない。しかし、幸いにも一九一九年研究者ペレイラ・デ・ソーサによって大著『ポルトガル地震一七五五年十一月一日とその人口学的研究』のなかに主要な部分が採録された。ただし、ポルタルの膨大な論述を、ソーサは原典における順序ではなく、自著の構成と展開に即応させ、多数の段落に分割して引用している。本稿ではこの震災記録をできるだけ時間の経過に沿って復元し、主要な段落の試訳と検討を試みたい。

ポルタルによって綿密に描写されるオラトリオ会聖霊修道院は、リベイラ王宮の北西、ノヴァ・ド・アルマダ街にあった。この坂道は一五世紀に形成された新街界限に属し、中腹に位置する聖霊修道院から、登ればシアード地区のカルモ修道院やサン・ロケ教会へ、降れば王宮広場や河岸地区に通じる。延々たる神父の証言は、まず聖霊修道院における万聖節の前夜から始まる。

ノバ・ド・アルメダ街のオラトリオ会修道院が不運にも大地震に直撃され、倒壊と破壊に至る哀切で劇的な経緯について物語を始めよう。災禍に覆われた九ヵ月間の出来事を網羅したいが、八月一日すなわち今日もまた、大地の揺れを感じたという有様である。

この記録を挿話で始めることを許して頂きたい。果たすべき目的のため、腹藏なく語らざるをえないからである。それに続いて凄絶な一日の惨事と悲劇について叙述しよう。

あの日に先立って、わが身に生じた不吉な出来事をまず率直に語りたい。以前からマヌエル・ディアスの美事な製作、主イエスの十字架像を私は持っていた。手に入れたのが大層嬉しく、あの世への旅立ちにも、道連れにしたい気持であった。その十字架像には神の御業が崇敬の念をもって表現されていた。

万聖節の前日いつもの説教を済ませた私が、同僚の数人から聞いたのは小さな地震、人によっては気づかぬほどの地震が二度起きたことである。それを気にもしないで僧坊に戻ったが、そこでは道路側の壁は漆喰にひびが生じ、かねて割れそうでもあったので、反対側の片隅で横臥した。しかし、なんらの心配も感ぜず、眠ったのである。

眠りに落ちると、その十字架像が夢に現れ、もはやそなたの目に主は映じないと告げる。夢枕で私の心は深く傷つき、わが罪の赦免を主に哀願する。必死の思いである。主のお応えは変らない。懇願を続けながら、苦悶は増し、恩寵を賜るのは絶望的と感じた。やがて目覚めた私は、陰鬱な気持である。床を離れたあと、一抹の困惑と深い苦悩に包まれつつミサに参じた。それが済むと、個別の祈祷をすべく僧坊に戻った。①

ポルタルの震災記録は被災の規模と状況について際立って精細であり、

これを充分理解するためには、修道院における組織や生活について基本的な事柄を知る必要がある。ヨーロッパ

① Manoel Portal, *Historia da ruina da cidade de Lisboa*, pp.18-28. in F. L. Pereira de Sousa, *O Terremoto do 1º Novembro de 1755 e um Estudo Demografico*. Lisboa, 1932. Volume III, pp. 614-615.

パにおける修道院の原型は、六世紀イタリアの聖者ベネディクトにより造られたとされる。「我ら自身の力は充分ではないが故に、主に向ってその恩恵の助けを与えられんことを希う。」各人が生来非力であるために、神を求める人たちがひとつの共同体をなし、相互の敬愛と支援のもとで錬磨する必要がある。されば我らは主の奉仕のための学校を建てよう。それには厳格にすぎず永遠の命に達するところにあった。①

こうした『戒律』を始原とするベネディクト会は、グレゴリウス一世はじめ歴代のローマ教皇に教導され、中世の主要な修道会としてヨーロッパ各国へ広がった。ベネディクト会で求められる誓願は、定住、従順、純潔の三項目である。なかでも定住誓願、一定の組織に所属し、そこに住居を定める誓いは、修道院発展の重要な貢献とされる。②

さて、ノヴァ・ド・アルマダ街における万聖節の朝について、ポルタルはつぎのように語る。

礼拝規定書に定められた小部屋でしばし寛いだことを憶えている。ジョアン・バリボサ神父が来られてまもなく、新回廊に沿う小部屋の床板が揺れ始めた。床板が軋るのに気づいた私は、すぐに地震だと悟り、神父に続いて庭園とは逆の方へ急いで逃げた。もしも地階の回廊から食堂へ向っておれば、命を失ったであろう。バリボサ神父が先に進み、門を潜る際に背後を振り返った私は、横転する木箱と作業台の間に倒れた。頭上で回廊の屋根が崩れ、礼拝堂の上に倒壊する。向側の新回廊ではディオゴ・ヴェルネイ神父はうずくまる。私はと言えば、身体が埋れたものの、石などは落下せず、頭の痛みもない。地震は七分間続き、その間死の接近を刻々と感じながら、鎮まるまで神に慈悲を求めた。

震動が止んでも、身動きができず、動揺して大声で救助を求めた。神の御心によって窓辺から脱出できた方々、フランシスコ・ダ・カルバロ副修道院長、ホウチスモ修道士、アントニオ・ゴンサルヴェ修道士、さらにはジョアン・バリボサ神父と商人のマヌエル・ゴンサルヴェ氏など、大いなる博愛を發揮され、みなで私を救出された。岩石が両脚を塞いで、それを持ち上げるのに人手を要し、私の衣服も裂き破れた。救い出されたのは幸運であるものの、脚は腫れ、目は血に染って、重傷の身で庭園の方へ這い上った。③

ポルタルが所属するオラトリオ会は、十六世紀中葉のローマで聖フィリポ・ネリによって設立された。歿後聖者の列に加えられるネリは、一五一五年フィレンツェで市庁公証人の家庭に生まれた。マルチン・ルターによって宗教改革の口火が切られる二年前である。つとにフィレンツェでは一四八二年ドミニカ会修道士ジローラモ・サヴォナローラがサン・マルコ修道院へ就任し、メディチ家の独裁とローマ教皇庁の腐敗を説教壇から痛撃した。やがて彼は政治の実権を掌握し、フィレンツェから奢侈の一扫を図ったが、神権政治への反発も強まり、一四九八年宗教裁判の結果火刑に処せられた。こうしたサヴォナローラの事蹟はボヘミアの神学者ヤン・フスの受難とともに、宗教改革の先駆とされる。その後もフィレンツェではサヴォナローラへの敬慕が秘かに保たれ、公証人ネリも深く尊敬していた。敬虔な少年フィリポもサン・マルコ教会におけるドミキカ会の礼拝と説教にしばしば参じたとされる。後年彼はドミニカ会について語るところによれば、脳裡にある叡智はすべてサン・マルコ教会

① 石原謙著『キリスト教の展開』岩波書店、一九七二年。五五・五七頁。

② ファン・ラーレン著『平和の山』エンデレル書店、一九五六年。一六九―一七一頁。

③ Portal, *op.cit.*, pp.2-8. in Sousa, *op.cit.*, Volume III, p. 615.

神父たちの賜物なのである。①

十七歳にしてネリは富裕な親戚へ養子に出されたが、家業の織物取引に打ち込めず、山上のベネディクト会修道院へ頻繁に赴いた。信仰の道を歩もうと、一五三三年彼は彼はローマへ旅立ち、しがない労務で生活の糧を得ながら、病人や巡礼への奉仕活動が続ける。

サン・トマス教会の司祭に彼が叙階されたのは、一五五一年三五歳のときである。やがて彼を囲んで小人数の信者が定期的に集まり、礼拝堂での会合を意味してオラトリオ会と呼ばれるようになった。これらの人たちと慈善事業に携わるネリは、出先の聖ヤコブ病院でイグナチウス・ロヨラと巡り会った。

すでに一五三四年ロヨラは六人の同志とイエスズ会を結成し、一五五一年にはカトリック随一の中等教育機関、コレジオ・ロマーノを設立した。この間ロヨラの同志フランシスコ・ザビエルはインド、マラッカ、日本へと伝道の旅を重ね、コレジオ・ロマーノ開校の翌年中国で逝去した。宗教革命によって苦境に立つカトリック勢力を、イエスズ会と同じくオラトリオ会も刷新する役割を担った。シトー会など中世の修道会は山里への隠棲と瞑想等の修行を主眼としたが、これら新たな修道会、いわゆる托鉢修道会は都市における住民の教化と救済を重視した。しかし、軍事的な規律と海外への布教を重視するイエスズ会とは異なり、ネリのもとでは会士相互の敬愛と隣人への慈善事業に力点が置かれた。ベレット著『聖フィリップ・ネリーオラトリオ会の創設』にはオラトリオ会士の日々がつぎのように叙述される。

オラトリオ会修道院では朝食、昼食、夕食の前後に宗教書の朗読がなされた。ほぼ同じ年齢の青年ふたり、僧衣を許されたばかりのジェルマニコ・フェデリとオクタヴィオ・パラヴィシニが、一週交代で朗読を担当した。

朝食と昼食の際には聖書と近代語の宗教書が読まれ、夕食のときには勤行や良心のありかたについて話し合う。共同の僧坊で会士たちに序列はなく、それを望む者もなかった。すべての会士がたがい目上の人として敬愛したのである。

彼ら全員が首長、院長、慈父として尊敬したのは、フィリップ・デ・ネリだけで、この方は聖ジェローム僧坊の深奥で、温情と慈愛に満ちた威厳に輝いていた。

宿舎も食事も給費もみな共同であった。

彼らは人間の集団と言うよりも、むしろ天使の集いを思わせた。こうした聖職者の宗教的な共同体にフィリップは、憲章ともいべき少数の規範を成員の合意で設けることを希望した。この規範は全員一致でまもなく採択され、忠実に実施された。②

軍隊的な秩序と規律を強調するイエスズ会とは対照的に、オラトリオ会ではこのように合議と対等を基本とする。とくに管理の中枢である修道院長についてはつぎのように規定された。

修道院長の任期は三年間であって、再選は可能であった。

修道院長に格別の荣誉や特権はなく、なにびとよりも多大の労苦と重大な責任が課せられた。

① Louis Ponnelle et Louis Bordet, *Saint Philippe Neri et la Societe Romaine de son Temps (1515-1595)*, Paris, 1927. pp.17-18.

柳沼千賀子著『聖フィリポ・ネリー喜びの預言者』ドン・ボスコ社、二二―二七頁。

② J. T. De Belloc, *La Fondation de l'Oratoire, Saint Philippe de Neri, Sienné*, 1895. pp.138-139.

修道院長は別格に扱われるのは、聖歌を奏するときと食卓に就くときだけである。

修道院長は厳格で峻厳な統率ではなく、心優しく寛容な指導に努めねばならない。①

一六一一年ルイ十四世治下のフランスで、母后マリ・ド・メデイチの聴聞司祭、ピエール・デ・ベリユレ枢機卿によってオラトリア会が結成され、この修道会でデカルトを継承する哲学者ニコラス・マルブランシュやジャンセニズムの論客となる神学者パスキエ・ケネルが育てられた。さらに一六五九年リスボンでは、王室礼拝堂の司祭バルトロメ・デ・ケンタルメがオラトリオ会を設立し、一六七四年シャイード地区ノヴァ・ド・アルマダ街に聖霊修道院が建設され、施療院も付設された。ここでも創立者聖ネリとオラトリオ会初期の遺風が継承され、会士相互の敬愛と扶助が重視されたことは、ポルタル神父の被災記録からも充分察知できる。

ジョゼ・クレメント神父は先見の明と凜とした気概を示される方であるが、信者の告解を受けたあと、工事中の門口で地の揺れを感じたため、一階の僧坊へ走り、開け放たれた窓辺に身を支えられた。窓枠を握り締めた神父は、新回廊の屋根が落ち、土台もろとも僧坊が崩れるのを目撃する。食堂の上には穹窿も倒壊した。そのときわれらの恩師、フィリップ・ネリ神父の悲鳴が聞えた。きわめて博学で高德なこの方が、最期には瓦礫に埋もれ、背中しか見えなかった。恩師が柵席の方へ歩かれる姿を、ミサのあと聖歌隊席から見たばかりである。

震動が止むと、クレメンテ神父は瓦礫を押し分け、事なきを得た。すぐに彼は周囲に告解を促し、私も一緒に告解を行った。それも終わらぬうちに、血を洗い落とした修練士バルソオ・デ・アルメイダが、脇に来て告解に参加した。修練士のホウリスノと看護人マノエル・ディアスの安否を確かめるため、ほかの人たちと一緒に彼も新回廊から駆けつけたのである。ホウリスノとマノエル・ディアスは階段を降りて地階の下の道を辿り、アントニオ・ペレイラ神父を救出した。この方は受胎祈禱室で地震を感じ、上の回廊へ階段へ急いだとき、第二の揺れに襲われ、そこで震動が止むのを待ち、幸運にも荒墟から救出されたのである。他方このとき長い回廊を走っていた修練士バルトロメオ・デ・アルメイダは、転倒して瓦礫に埋もれた。しかし、奇蹟的に救出され、かなりの負傷もまもなく快癒した。

同じ回廊でヴィセンテ・コラス神父と修練士の介護人が絶命された。神父は以前から病身であるものの、徳高き読書家であられた。医薬を捧じて介護人は、とりわけ聖オラカールオの勤行に励んで、主キリストと聖母マリアの受難、さらにはこの聖者の艱苦に感銘を受け、托身のヨハネと呼ばれていた。

脚を骨折した若者ジョアンは露台で発見され、やむなくそこを切断したものの、命は取り止めた。荷車の下に身を伏せたところ、満杯の樽が倒れ、脚を砕いたのである。教会が倒れてくる、という叫喚のなかで、とりわけ聖歌隊席の下で多数即死した。祈禱堂の聴聞司祭数名も同じ事態となったが、全員が脱出できた。

修練院のなかで危機に瀕した修練士たちは、みな神に憐憫を求め、慈悲を願った。その建物も古修道院も持ち堪えた。しかし、修練士祈禱堂ではアントニオ・ジョワキム神父と修練士の脇で天井が崩れたものの、聖者フィリップ・ネリの立像は被害を免れた。また、駆け出した修練士コルネリオは柵席へ倒れ、頭部を打撲したが、気丈に立ち上り、危機を脱した。

ミサを司るジョワキム・フェラズ神父とジョゼ・クレメンテ修練士は、震動を感じて修道院の石段へ逃れた。そこに踏み込んだふたりは、石段の破壊を浴びて卒倒する。意識が戻らないまま夜となり、以後三日間そこで死と闘った。この建物では惨事が重なり、日々天災の犠牲者をネセシダスへ埋葬するため、荷車と梯

① J. T. De Belloc, *La Fondation de l'Oratoire, Saint Philippe de Neri*, Sienné, 1895. p.175.

子が運び込まれた。このときとくに熱意を発揮され、称讃の的となったのはジョアキム神父である。

惨憺たるこの日、マヌエル・アロウジョ神父は熱病で病床にあり、周囲の破壊で生命の危険に曝されたものの、迅速に駆けつけた人たちが、庭園の安全な場所へ導いた。

どの神父もこの日は悲劇的な場面に曝された。全員が生き埋めとなる危険も迫った。しかし、食堂の上方にあたる新回廊が倒壊し、五フィート余り瓦礫が積み重なるなかで、神慮によって中心の障壁は持ち堪えた。新回廊の下方に位置する建物も破壊を免れた。修道院はほとんど壊滅した。修道院の窓に付された新しい装飾も粉微塵となり、身廊へ通じる石段に散った。調剤室と石造の門も倒壊し、数名を即死させた。新穹窿も同じく崩れ落ちる。しかも、無惨にも聖歌隊席へ穹窿が倒壊する前に、聖堂のふたつの身廊が完膚なく破壊された。①

ポルトガルにおけるオラトリオ会の創立者バルトロメ・デ・ケンタルメは、一六二六年大西洋に浮かぶサン・ミゲル島の名家に生まれた。この島を中心とするアゾレス諸島は、十五世紀の前半ポルトガル人に発見され、植民地ブラジルへの中継地、さらにはオレンジ輸出の原産地として知られていた。十七歳のとき故郷を離れた彼は、エボラ大学で哲学を修め、さらに数年コインブラのコレジオと大学で神学を究めた。バルトロメが最初に聖職に就いたのは、一六五二年リスボンの聖霊教会においてである。② やがて彼の篤信と学識は宮廷にまで伝わり、王室に出仕するに至る。ローマの聖職者ジョセフ・カタラノは著書『バルトロメ・デ・ケンタルメ神父の生涯』において左記のとおり述べる。

国王ジョアン四世はバルトロメの敬虔さ、重厚さ、該博さに注目され、一六五四年王室礼拝堂の教導司祭および告解司祭に登用した。こうして豪胆にも彼は、国王の庭園を掃き清める事業に着手するのである。宮殿において刹那的な歓楽が繰り返され、その度に怠惰な人間の疾患が殖えることを、知らぬ者はいない。また、魂の徳操を保つには、宮殿から立ち去るがよい、とも世人は言う。いかにしてバルトロメは奇蹟を成し遂げたであろうか。国王の愛顧を受けて王宮に登った彼は、人々の精神を日々錬磨したばかりでなく、説得力ある助言を要人や廷臣に供した。また、古式の華麗な衣装をば、キリスト教の厳格な訓練で懲罰し、一步に徳操へと導いて、かくも豊饒な教理を会得させ、修道院のごとく敬虔な堂宇に王宮を一変させたのである。③

一六四〇年スペインからの再独立を達成したジョアン四世は、マラッカ、アンゴラ、ブラジル等で植民地を確立し、一六五七年に逝去した。以後摂政となったその王妃ルイザ・デ・グスマオからもバルトロメは崇敬され、彼女の支援を受けて一六五九年初めてポルトガルにオラトリオ会修道院を設立する。この修道院は彼がかつて勤めた聖霊教会と合体し、以前からそこにある施療院も併合した。バルトロメは宗教書の著述でも知られ、『幼き日のキリスト』（全三巻）、『説教集』（全二巻）、『主日』（全三巻）等が挙げられる。④

勉強と研鑽を重ねる聖霊修道院は、この時代にも優れた学者を擁していた。さきに述べたとおり、神父ペレ

① Portal, *op.cit.*, pp. 2-8. in Sousa, *op.cit.*, Volume III, p. 615.

② Joseph Catalano, *Vida do Veneravel Padre Bartholomeu do Quental, Fundador da Congregacao do Oratorio nos Reynos de Portugal*, exposta no idioma Portuguez por Francisco Joseph Freire, Lisboa, 1747. pp.3, 8-11, 13-14.

③ Catalano, *op.cit.*, pp.18-20.

④ *Ibid.*, pp.50-53.

イラ・ド・フィゲイレドは著名な神学者のひとりに数えられ、ポンバル政権の宗教的な参与であった。本節の主題であるマヌエル・ポルトルの著述は、リスボン大地震のもっとも詳細で長大な証言である。さらに修道士ジョゼ・フレイラは前述のジョセフ・カタラノによるバルトロメ・デ・ケンタルメ伝をつとに一七四七年ポルトガル語に翻訳し、やがて一七五八年大地震に直面した王権の膨大な勅令と布告を編纂した。リスボン大地震の危機管理に関する基本的な史料、『ポルトガル王権緊急政策釈義』がそれである。

神父たちも多くは争って戸外へ殺到した。しかし、海嘯によって危険は倍加し、やがて郊外のヴァレ・デ・ペレイレ緑野とネセシダス修道院への避難が始まった。避難の途上アゴステイノ・モンテイロ神父は、聖鉢と聖餅を携えて、説教を続け、告解を聴いたと言う。また、宵闇が迫ると、モンテイロ神父は聖杯を袋に包んで説教を重ね、ベネディクト会修道士アントニオ・コスタ・クト様も、聖歌の斉唱を続けながら、包みを両手で運ばれた。怖るべき日の夜瓦礫の山を越えて、かくも難渋な道を来たことを、クト様は緑野へ着くや、秘蹟の聖杯で祝福されたようである。

私と言えば、さらなる震動に慄然として、修道院の中庭から出たいと思ったが、歩行の困難なわが身である。詮方なく急遽ふたりの男に担がれ、積み重なる遺体を押し分けて荷車の足場まで来た。瓦礫の山を越えてサンタ・カタリーナ門へ辿り着くと、そこではアントニオ・ソアレス神父が路上で説教し、告解室から脱出した私の従弟アントニオ・ポンツアスも、上着もなしにキリスト像を手にし、福音を説いて、悔悟を勧めていた。従弟に近づいて、建物に入れぬかと私は尋ねたが、それが遮られた。屋内から逃れた数人がフェレシアノ旧門の路上で悔悟を誓ってる。瓦礫を避けてロレトへ迂回し、三位一体小路に入ると、教会が倒壊している。いかにしても進みたいと念じ、幾度も試みて先に行くことができた。ラルガ街ではマヌエル・ロドリゲス神父の説教を見かけたが、サン・ペドロ・アルカンタラで目にしたのは死者と荒墟だけである。フラシスコ・ボルジェスに伴われ、サン・ロケを出て、修道院前の階段に座った。そこへ家族を連れてフェリッペ・ダ・コスタが来た。そこからタルカ伯爵の豪邸に到ると、もはや歩けない身となった。ボルジェスは従僕のひとりを呼んで、私を騾馬の背に乗せ、他の従僕が手綱を曳いて緑野までと導いたのである。絹糸工場まで来ると、第二の地震が発生し、駆け出した多数の人々が私を囲み、跪いて赦免を哀願する。こうした惨状を抜けてついにヴァレ・デ・ペレイレ緑野へ到着した。緑野の樹の下で寛仁にもジョセフ・フェレイラ様は、椅子を差し出され、ご自身の上衣で私を包んでくださった。①

オラトリオ会聖霊修道院は、リベイラ王宮の北西、ノヴァ・ド・アルマダ街に位置するが、この坂道も家々の瓦解と狂躁する住民で遮断された。親友の安否を確かめに登ってきた貿易商ブラドックが、危険を感じて遠ざかった地点である。麓の総大司教教会とサン・パウロ教会は炎上し、王宮広場から河岸地区にかけては、津波も押し寄せた。坂上のシアード地区でもカルモ修道院や三位一体教会が壊滅し、サン・ロケの正門と塔が倒壊するが、負傷したポルタルはやや遠いサンタ・カテリーナ広場へまず運ばれたようである。ここで彼が目撃した情景、すなわち群がる避難民、横臥した傷病者、祈祷や改悛を促す素足の聖職者は、後年ジョアン・クラマの壮麗な油絵に描かれた。

ポルトガルのオラトリオ会は、聖霊修道院に加えてリスボン西南のネセシダス宮殿に、一七四五年広大な教会と修道院を建設した。また、西北の近郊ペレイロ溪谷のコンポリートにも学舎と緑園を有していた。壊滅するノヴァ・ド・アルマダ街を離れた会士たちは、一方ではネセシダスの教会と修道院へ、他方ではペレイロ溪谷の学

① Portal, *op.cit.*, pp.2-8. in Sousa, *op.cit.*, Volume III, p. 616.

舎へ避難し、これらの隊列に他宗派の聖職者も加わったことが、ポルタルの記録から判る。

ローマで結成されたオラトリオ会最初の衆会は、ネリを含む六人の聖職者と記録される。やがて会士は一五六七年に十八名、一五七八年には三三名に達し、そこにはスペイン人、フランス人、ギリシャ人も含まれた。①

ポルタルの記録には被災した聖霊修道院について、当時居住した会士の氏名が列記されている。左記のとおりその構成は神父すなわち修道士五十名、修練士三一名であり、このほか若干の従僕や炊事婦なども住み込んだであろう。管理にあたる幹事三名もオラトリオ会の会則に準ずるが、幹事第一のモンテイロは地震とは異なる事由で逝去したと思われる。モレイラ・デ・メンドンサ著『世界地震通史』にはオラトリオ会士の死亡四名と誌され、地震のため後日物故したビント神父を別とすれば、ポルタルの記載と合致するからである。

聖霊修道院 大地震発生の時点に於ける構成員

新回廊

神父	マヌエル・モンテイロ	修道院幹事第一	死亡
神父	テオドロ・デ・アルメイダ		
神父	ベルナルド・デ・S・パヨ		
神父	ヨアキム・カステロ		
神父	ヴィセンテ・コラソ	地震により死亡	
神父	ルイズ・ジョゼ	修道院幹事第三	
神父	ジョアン・シュヴァイエ		
神父	アントニオ・コエルホ		
神父	クレメンテ・アレクサンドリノ		
神父	ディアゴ・ヴェルネイ		
神父	フィリップ・ネリ	地震により死亡	
神父	フランシスコ・ジョゼ		
神父	アマロ・ペレイラ		
神父	ジョゼ・クレメンテ		
神父	アントニオ・ジョゼ	検事総長	
神父	ベルナルド・ロペス	信仰指導者	
神父	フィリップ・タヴァレス	高位聖職者	
神父	マヌエル・ポルタル		
神父	ヨハキム・フェラス	地震により死亡	
神父	フランシスコ・マヌエル	代理人	

古修道院 第一回廊

神父	アゴスティンホ・モンテイロ
神父	ジョゼ・トロヤノ
神父	アントニオ・ヴィエイラ

① Ponnelle et Bordet, *op.cit.*, pp.119, 122, 247-248.

修練士 ヨアキム・デ・オリヴィエラ

修練士 ジョアン・ドス・サントス

神父 ベルナール・ジョゼ

神父 ナヌエル・デ・メレ

神父 ドミンゴス・ペレイラ

修練士 ジョゼ・ダ・エンカルナサオ 地震により死亡

神父 ルイズ・ダ・モタ

神父 ジョアン・コル

神父 ヨゼ・ピント 地震により後日死亡

神父 ジョアン・バルボサ

神父 アルベルト・ドス・レイス

神父 エスタシオ・デ・アルメイダ

修練士 フランシスコ・ザビエル

修練士 フランシスコ・デ・カルヴァルホ

神父 ジョアン・フレイレ 修道院幹事第二

修練士 ジョゼ・ドス・サントス

修練士 ジョゼ・フェルナンデス

神父 マノエル・フェレイラ

神父 アントニオ・ペレイラ

古修道院 第二回廊

神父 ジョアン・バチスタ

神父 アルベルト・カエタノ 司祭

神父 バルソロメウ・キンテラ

神父 ジョゼ・デ・ファリア 聖具保管係

修練士 マノエル・ジョアン

神父 ヴァレンチム・デ・ブルホエス

神父 マノエル・デ・アランジョ

修練士 アントニオ・ゴンサルヴェス

修練士 ジョアン・ヌネス

神父 フランシスコ・デ・サレス

神父 マノエル・ベルトク

修練士 ベルナルド・ダ・シルヴァ

修練士 ジョアン・レイタオ

修練士 ジョゼ・フェレイラ

修練士 ドミンゴス・ジオルジェ

修練士 アントニオ・アンツネス

修練士 ジョゼ・ペレイラ

修練士 ジョアン・デ・ソウサ

神父 ジョゼ・アルベルト
神父 デイオニシオ・ペレイラ
神父 ロドリゴ・デ・マトス
神父 ベルナルド・デ・ブルホエス

修練院

神父 ルイズ・カルドソ 修練院教授
神父 ミグエル・ダ・シルヴァ 修練院助手
修練士 アントニオ・ヨアキム
修練士 バルソロメウ・デ・アルメイダ
修練士 ヨアキム・デ・フォイオス
修練士 コルネリオ・キン
修練士 マヌエル・デ・ソウサ
修練士 ボニファシオ・フェレイラ
修練士 アポリナリオ・ヴィエイラ
修練士 ヴィセンテ・アマド
修練士 アントニオ・モレイラ
修練士 アントニオ・アルヴェルス
修練士 ジョゼ・ダ・ヴェイガ
修練士 ジョアン・ファオスチノ
修練士 アントニオ・ダ・ノブレガ
修練士 マシウス・ロドリゲス

①

初出 二〇一四年八月二九日
更新 二〇二一年八月十日

第二節 聖霊修道院 建築・装備・祭具の焼尽

聖霊修道院の人的被害に続いて、神父マヌエル・ポルタルは、さらに建物や物品について詳細に証言するが、ここでも宗教的な建築や美術に関しある程度予備知識が必要であろう。

ベネディクト会士である歴史学者デヴィド・ノウルズは修道院初期の施設についてつぎのように言う。聖ベネディクトの戒律等から復元すれば、六世紀イタリアの修道院は比較的小さな石の建物で、居住する修道士は十人程度であった。祈祷所、食堂、共同寝室も大きなものではなく、すべて一階に位置した。祈祷所には簡素な祭壇、木製の長椅子と腰掛けだけが置かれる。その建物には台所と各室が付属し、その周りに事務所や納屋は造られたが、回廊はなかった。①

以後の千五百年に及ぶ修道院の歴史を通観して、キリスト教建築の権威ヴォルフガング・ブラウンフェルスはつぎのように言う。静寂、謙讓、厳格、禁欲、平和を景仰させる構築は、情熱的で一貫した生活態度を前提とし、すべて修道会戒律の制約を受けている。神を祀り、福音書を朗読する聖堂が、こうした基本構造の中心であって、壮大にして豪華では支配的な建造物に築造される。ついで修道士が共同で戒律を購読する集会室が重要であり、聖俗を兼ね備えるよう整備された。のちにこの集会室は祈祷堂（オラトリオ）として発達し、フィリップ・ネリによる修道会設立も契機ともなった。また、修道院では食卓において福音書が朗読され、食事自体も救済の方途とされる。共同の食事は最後の晩餐の秘蹟に比せられて、大食堂が第三の地位を獲得するのである。②

十二世紀西ヨーロッパで全修道院の頂点に位置したクリュニー修道院では、所属する修道士が三百名を超え、聖堂には千名の参列が可能であった。ローマ教皇や多数の枢機卿、各国の君主や王族をも招き、大食堂と大震室の収容人員は千二百名とされる。修道士五一名、修練士一七名を擁する聖霊修道院も比較的大きな規模であり、聖堂と図書館はもとより、大礼拝堂、小礼拝堂、祈祷堂を備えていた。

アルマダ新街のオラトリオ会修道院に関しては、火災による甚大な被害も忘れることはできない。ここで体験したほどの惨憺たる顛末は、他修道院の詳説にもおそらく見出されぬからである。

フォルノス街アヴェ・マリアスから飛火した炎は、十字架像を経て烈しく僧院の裏手へ拡がり、地震で破壊された古修道院を完全に捉えた。ついで聖堂の両身廊と修道士礼拝堂の屋根が燃え、堂宇と回廊に配されたすべて、また神父らの僧坊と配備されたすべての家具が灰燼に帰した。

古修道院の敷地ではとりわけ尊重されるオラトリオ会の建物ふたつが焼尽した。修道士祈祷堂と聖母マリア図書館がそれである。

修道士祈祷堂は広壮で細長い建物で、適度な高さの天井にはフレスコ画法で聖母マリアの昇天とこれを見上げる聖者フィリップ・ネリが彩色されていた。これら貴重な絵図は私たちを感嘆させるとともに、深い信仰へと導いたのである。祈祷堂では内壁の一部が繊細な彩色タイルで飾られ、そこには聖フィリップ・ネリの徳行が描かれていた。また、天井への空間に置かれた精妙な彫刻は、フランシスコ・ペドロソ神父や多くの修道士が所望したものである。それらは数々の遺物とともに配置され、修道士フランシスコ・デ・レモスの労によって金箔にされ、銀の輝きも添えられた。同様に祈祷堂の内装には、総大司教猊下のご令弟、フラ

① D・ノウルズ著、朝倉文市訳『修道院』平凡社、一九七二年。五〇―五一頁。

② ヴォルフガング・ブラウンフェルス著、渡辺鴻訳『図説 西欧の修道院建築』八坂書房、二〇〇九年。一三、一六一―一九、三六五頁。

ンシスコ・マヌエル様の寄進によるダマスコ織の化身画があり、色鮮やかに描出とともに、豪華な装具と精妙な銀製魚類も配されていた。深い信仰を表わす大きな十字架像も祈祷堂にあった。また、聖具室には聖なる秘蹟と幼いイエス像も収められ、後者は高さ二フィートほどで、初々しい美しい立像、まさしく敬虔で完璧な立像なのである。この幼子については福音と聖母受胎について語る聖アントワーンの書簡に示されている。①

南フランスのクリュニー修道院では十一世紀後半に修道士が、六十人から三百人と激増し、壮大なロマネスク教堂が建設された。修道士の増加に応じて居室や食堂も当然大規模となるが、こうした修道院建築についてノウルズはとくにふたつの特徴、広大な教会と四辺形の回廊を指摘する。広大な教会が必要であるのは、構成員の多大な数にもよるが、むしろ礼拝、聖歌、行列などの儀式を荘厳にするためである。また、四辺形の回廊は修道院の要であって、構成員の往来や集合に至便な造作である。すなわち、四辺形の上方に教堂、下方に僧坊と集会室が位置し、脇の片側に食堂と厨房、他の片側に客室と倉庫が造られた。②

オラトリオ会が独自に造営した最初の建築は、ローマ中心部の聖堂Ⅱ修道院サンタ・マリア・イン・ヴァリセラ（シエッサ・ヌオーヴァ）である。イエスズ会コレジオ・ロマーノを範として、この造営は一五七五年聖堂の建設から着手され、一世紀後修道院の落成によって完成した。境内には広大な聖堂、祈祷堂（オラトリオ）、回廊に囲まれた三つの中庭がある。とくに際立つは楕円形の大食堂であって、著名な建築家ポッロミーニによって設計され、修道士の居住域たる第二中庭と生活の便宜を供する第三中庭の間に配された。大食堂では種々の行事も営まれ、視覚的・音響的效果をも考慮して、楕円形に造られたと言う。③

小聖堂の外側にふたつの門、新回廊の門と聖具保管室の門があり、美事な対比をなして新回廊の上方に男の子を抱く聖ジョセフ、聖具室の上方には聖フェリッペの像が飾られたいた。後者は被災後緑地の仮設小屋に運ばれ、祭壇に飾られる。修練堂への回廊へ向かう門は祈祷室の正面に位置し、かつて一夕来臨された国王ジョアン五世陛下が、碑文に記念する言葉を遺された。当時の修道院長マヌエル・ロドリゲス神父の発意により、すなわちフランシスコ・ペドロソ神父、ペドロ・アルベレス神父、ジュアン・アントゥネス神父、ジョアン・コロ神父、マノエル・アルメイダ神父、ジュリオ・フランシスコ神父など、すべての高僧が信仰事項について論じ合い、国王陛下が結論を示されたのである。この事蹟に因む祝典を、聖母マリアの受胎を慶賀する夕べに、神学生が行うのが常であった。

加えて一層委細に述べれば、小聖堂に面して琉瑠るるの窓と彩色された扉が祈祷室に一對あり、それらの真中には同じく彩色された円窓が造られていた。真向いの教堂にも回廊へ連なる門があり、説教を勤める方々はそこを通る。礼拝堂は総体的に黄金で飾られ、祭壇の下にローマ教皇から現在の国王陛下に贈られ、聖者の遺骨を納めた金櫃かねひつが祀られていた。

回廊の門には精緻な細片から成る小型の完璧な壁板が組まれ、その一角には男の子を抱く守護聖人の板絵が、ヴィセンテ・デ・バストの配慮で回廊の高さに釣り合うよう置かれた。廊下に沿うすべての窓にも諸聖

① Manoel Portal, *Historia da ruína da cidade de Lisboa*, pp.18-28. in F. L. Pereira de Sousa, *O Terremoto do*

1.º Novembro de 1755 e um Estudo Demográfico. Lisboa, 1932. Volume III, pp. .616-617

② ノウルズ著、前掲、一三三―一三七。

③ 岩谷葉子「ローマにおけるオラトリオ会の成立と修道院建設について」F・ポッロミーニの『オブス・アルキテクトニクム』を中心に「日本建築学会関東支部研究報告集 二〇〇一年。四八六・四八八。

人を祀る壁龕^{へきがん}が造られ、ドミングス・ペレイラ神父による独自の彩色陶板とヘンリック・コレア神父の制作が飾られた。また、別の回廊が門から門へと通じ、その一端は聖歌隊の壇上に直接降りるのである。修練院には屋根を彩色された三つの回廊が配され、修練者の尊師の肖像としてどの僧坊の門口にも板絵が掛けてある。それらは尊師が採録をする姿であり、それに相応しく蔵書も添景とされた。かつて修練者として学んだ頃、僧坊の書籍を増補されたからである。しかし、これらすべては猛火によって跡形もなく焼失した。

ドミングス・ペレイラ神父の労苦と精励によって集積されたいわゆる聖母図書館は、適度な大きさの建物であって、その舗床はさまざまな彩色の木材で象眼細工され、中央の台座では七色に映える精妙な宝玉が、鏡のように輝いていた。彫刻された良質の木材で書架が作られ、抽出の上側も黄金の浮彫で飾られる。壁面の上方に貴重な板絵が掲げられ、天井は白色と金色を組み合わせ、壮麗な金箔に仕上っている。美しい装幀の稿本はみな聖母マリアを主題とし、比類なく貴重な蔵書である。しかし、震災を免れたものも含め、これらすべてが火災により燃えた。まさしく取り戻せない損失である。

火焰はバルソロメウ・ド・キンタルの聖遺物と列福式の記録をも焼いた。あらゆる聖像もろとも聖堂全体が燃え、若干の聖杯と聖瓶を別として、銀飾りの貴重な装具もすべて灰燼に帰した。また、四万クルザドにも値し、燦然たるダイヤモンドの円盤に飾られた聖体顕示台、国王ジョアン五世陛下によって献じられ、王族の来臨に際してのみ開かれる顕示台も焼失した。ダイヤモンド、ルビー、黄玉、ガーネットを鏤めた光背全体も同様である。独自の銀細工で作られ、五脚の聖体顕示台もやはり破壊された。しかし、ダイヤモンドを鏤め、八千クルザドに値する聖杯は被害を免れ、偶々居合わせたフランシスコ・ルイズ神父の慧眼によって、瓦礫の間から取り出された。表面に見えたものの、運良く盗賊の目もかわしたわけである。当時跳梁を極めた彼らについて、ためらわず言おう。

同じく貴重な玉石で全体を守護され、燦然と輝く黄金の十字架像も燃えた。黄金と細工だけで六百レアルの出費を要したものである。また、やはり貴重な玉石で守護された敬虔なマリア像も冠が焼けた。いずれもヴィセンテ・デ・バスト神父が献じられた聖像である。託身を表徴する堂内のダマス力織装飾、あらゆる中位の燭台、絹糸と金銀の刺繍で飾られた回廊の拱門、オアトリ才会の紋章を金糸で表した織物、ビロードなど他の織物もすべて灰燼に帰した。これら織物は板絵と板絵にある空間を飾っていたのである。三対のダマスコ織の幕、大きな燭台に添えられた飾り紐つき掛布も同じく焼尽した。一対のゴーズ織仕切り、黄金の房を刺繍したビロードの飾り布、外来の紫色の垂れ幕、要するに聖堂全体を包んだ豪華な造作が、悲運にも一片の壁土を留めないのである。①

サンタ・カタリーナ教会などとは異なって、聖霊修道院は震災後ついに再建がなされず、敷地には別種の建造物が構築された。したがって、施設の構造も明確に把握できないが、中核をなす聖堂についてはつぎのような記録が遺されている。

花綱装飾の石門が聖堂の正面をなし、堂内には三つの身廊と、一対の円柱に支えられた聖歌隊席がある。これらの身廊を区分する五つの拱^{きようこう}構は短い円柱を基盤とし、すべて彩色されている。拱構の両面を飾るのは、金色の額縁に収めた板絵であり、上部には象眼細工の台輪が組まれた。

中央の身廊は宝石を鏤めた五つの窓に照らされ、天井には華麗な絵画が描かれた。神父たちは大礼拝堂にも円柱と円柱を配し、ふたつの窓から採光した。壁面の内装には方形の石材に花模様が刻まれた。祭壇の背

① Portal, *op.cit.*, pp.617-618.

後はふたつの石柱に支えられて青みを帯びた黒石が組まれ、上方は拱構をなしている。説教壇は幅広く、椅子は金色の木彫である。礼拝堂の側廊にはそれぞれ祭壇が祀られた。①

聖霊修道院に関するポルタルの証言は、前節で示したとおり、まず地震の発生に集中し、居住者の受難と建物の倒壊を語っている。右記の記録と併せて推断すれば、聖堂では正面をなす花綱装飾の石門が倒れ、拱構で仕切られた身廊は完全に破壊された。穹窿も円柱で支えられた聖歌隊席へ崩れ落ちた。ついでさきの引用のように、街路から襲った火焰は、まず身廊の屋根を捉え、聖堂全体が炎上したのである。祭壇のあらゆる聖像、燦然たる聖体顕示台、宝玉を鏤めた光背も燃えた。

金糸で精妙に刺繍された銀色の装具一式も同じく焼失した。神の祝福を受けた国王ジョアン五世がゼノアに発注された品である。それは上祭服、ミサ用の法衣、ちようほう長袍祭服、さらには祭壇の飾り布、説教壇の垂れ幕、書見台らしきものから成っていた。七千クルードの価値と思われる。

金色に織られた珍奇な紫色の装具も燃えた。これも上祭服とふたつの潇洒な台、金糸銀糸を織り込んだちようほう長袍祭服、祭壇の飾り布、説教壇の垂れ幕、書見台という一式であった。

古式の金糸で刺繍された装具、すなわち大礼拝堂の祭壇で用いられるちようほう長袍祭服、上祭服、飾り布という一式も失われた。

白金に輝き、国王ヨハヒム五世陛下が献納された装具、すなわち七着のちようほう長袍祭服、上祭服、ミサ用の法衣、祭壇の飾り布、説教壇の垂れ幕、書見台の一式も焼尽し、他の祭壇で用いられる白金ダマスコ織り上祭服もすべて同様である。主祭壇の豪華な飾り布は、素材の黄金を寄進されたその方に因んで、公爵夫人と呼ばれるが、金槌で叩いたように破壊された。金の刺繍を施した銀製のセバストロ像は、アヤ侯爵夫人が献納し、一五〇枚の金貨、四千八〇〇にも相当するが、同じく焼失した。その他多くのやや地味な品々、黄金の房を付け、多様に彩色されたビロードの葬具も同様である。聖フランシスコ・デ・サレスと聖アンナの祭壇で用いる貴重な飾り布と上祭服、要するに繊細な金糸で刺繍され、多様に彩色されたすべての飾り布と上祭服が焼尽したのである。

種々の燈明も消えた。敬虔の灯火五つは別として、多くの銀の燭台、あらゆる祭壇の蠟燭が焼尽した。聖ペドロ、聖アントニオ、聖リポリオと命名された身廊に、十五の聖像は置かれたが、それらの光輪も全焼した。交差廊の右手にある祈禱室では、磔刑されたイエスが聖母マリアに抱かれていた。主祭壇には聖母被昇天像が中央に、聖カルロスが左側、聖フェリッペ・ネリは右側に置かれた。サンタ・アンナでも聖母受胎告知像が中央、片側に聖アンナ、他の側に聖ヨワキムがあった。聖フランシスコ・デ・サレス礼拝堂では外側にふたつの壁龕へきがんがあって、聖カテリーナと聖ゲルチルーデスが祀られる。サンタ・アンナ身廊ではサン・ペドロ身廊へ通じる交差路の外側にイエス、マリア、ジョセフの三聖像を祀る祭壇があった。

聖ペドロ礼拝堂、敬虔礼拝堂、聖アンナ礼拝堂およびイエスⅡマリアⅡジョセフ礼拝堂の天蓋には、金色に彫刻され、聖遺物を収める櫃があった。聖フランシスコ・デ・サレス礼拝堂のふたつの櫃には聖者の生涯を描いた板絵が蔵された。この礼拝堂は多彩な宝玉の象眼細工で飾られ、日に四度ミサを行うよう、レインハ・フランセザ様の指示で床は板張りされていた。主礼拝堂も大理石で多彩な象眼細工がなされ、聖霊兄弟に守護される。教会の本体は箱形の建物で、交差廊まで百パルモ十（一パルモは二二センチ）、さらにそ

① Margarida Calado, Antes do Terremoto : o Chiado dos Conventos, *Faculdade do Belas-Artes da Universidade de Lisboa*. pp.99-100. online.

こから神父の墓掘と聖なる道まで十五か十六パルモである。さらに百パルモ進んだ回廊の上方では三つの身廊が地震で崩れていた。これらすべてが火災によって灰燼に帰し、いまやなんらの痕跡もない。

火の手は聖具保管室にも及んだ。尊敬すべき聖職祿受領者、アントニオ・コスタ・クート様が寄進され、大箱の上に飾られたロザリオ像は、地震で倒れたのち、火焰で燃えた。小聖具保管室でもすべて焼き尽くされ、パレオの銀の笏^{しゃく}、祈祷行列に用いる金飾り銀の十字架、ぶどう酒入れ聖具、銀の皿、水差しを失った。なおまた、聖具保管室の戸棚と木箱に収納される多くの貨幣も消えた。

祭壇の飾り布や銀の燭台とともに、オラトリオ会祈祷室も焼尽した。荒野の崇高なイエス像、十字架像、両側に置かれたふたつの聖像など多く作品も燃え尽きた。

聖体を拝受する祈祷行列のため用意されたダマスク織の修道院旗幟、われらの尊者に因む貴重な旗幟も焼失した。また、ダマスカ織で覆われぬ障壁の空間を埋める板絵、ベント・コルホの制作になる板絵も燃えた。^①

言うまでもなく聖堂は、典礼を捧げる衆会の場であり、奥まった中心的な位置に祭壇が据えられる。豪華な卓布を敷いた祭壇は、救世主イエスが現在化される場であり、黄金の十字架像と敬虔なマリア像が祀られた。典礼の頂点に供する十字架は、キリストの復活を象徴し、受難のみならず栄光をも示すとさせる。

聖堂中央の広い空間は、三つの身廊が区分けされ、光背に輝く十五の聖像が置かれていた。国王から献呈された聖体顕示器は祭壇中央の聖櫃に安置され、銀の燭台は主への崇敬として、多くは祭壇の近くに置かれた。ジョアン五世がゼノアに発注した上祭服や飾り布、アヤ夫人の献納によるセバストロ像、コルホの制作した板絵、さらにはトロヤノ神父の寄贈による聖遺物、客死した同輩の形見である聖母像、高位聖職者マノエルによって購入された掛け時計。これらをめぐるポルタルの叙述は、震災による被害の細目を示すだけでなく、修道院の聖像や聖器がどのような信仰と熱意によって整えられたかを語っている。^②

古修道院の高みにある回廊へも火焰は拡がって、余さずそこを破壊したあと、聖バルバラ祈祷室を焼尽させた。黄金ではなく、木彫りの彫刻を配した礼拝堂、さらに陸離たる絵画で際立つ僧坊もそのとき燃えた。これら回廊の全焼に加えて、神父らの白衣や黒衣を収めた衣装部屋も燃え、聖母マリアを祀る受胎告知祈祷室も灰燼に帰した。そこにはブドウの樹で作られた、小瓶を携える小さな聖像があり、内陣の聖母像と同じく尊いものとして壁龕に収められていた。祭壇のさまざまな聖者像のなかに、黄金の台座に座した小さな半身像がふたつあり、一方は聖遺物を携えた聖フィリップ・ネリ、他方は同じく聖遺物を手にした聖カミール・デ・レリスで、いずれもマヌエル・ジョゼ・トロヤノ神父が寄進されたものであった。清浄な祈祷室であるのに、結局は灰燼に帰した。この祈祷室では夕食のあとに九時から聖母受胎の神秘に関する夜半の講話のため修学生が集まり、翌日六時半まで学ぶのである。同様に聖トマズの日この聖者について哲学的な弁論が競われた。

類焼した回廊脇の物置には、四旬節の設営用具や聖像のあらゆる装備が収納されていた。また、病弱者の衣服、銀の食器、種々の器具を収める物置も焼尽した。こうした銀の食器だけでなく、インドの陶器も病弱者に沢山供された。崇高なる慈善としてディオゴ・マヌエル・クラド神父がその病棟に年一万五千レアル

^① Portal, *op.cit.*, pp.617-618.

^② カトリックにおける典礼や祭具については左記の書物を参照した。

高橋保行ほか著『教会建築』日本基督教団出版局、一九八五年。六六―七〇頁。

も寄付され、食事にも治療に役立てたのである。マノエル・フランシスコ同志も四十年間看病を続けられ、崇高な慈愛を発露された。また、それまで三十年にわたって熱心に看護され、病弱者への格別の慈愛をもって尽されたジョアン・サントシ同志は、みずからの生命の危険をも顧みず、患者の援助と救出のため全力を傾けた。悪性の熱病に冒され、入念な看護の必要な神父たちをも、彼は一心に救護した。一年有余の長患いのため、彼らの体力は衰え、不眠を訴えてもいた。ここでは恢復が遠ざかるため、空気を変えるよう慈愛をもって移動が敢行されたのである。

火焰は新回廊の階段から入って、前述の回廊に至る通路を焼き、本修道会の教父の肖像もその際に燃えた。すなわち、ベント・コレイラ、ヴィセンテ・ディアス、ペドロ・アルヴェルス、アントニオ・デ・ファリア、セバステイアン・リベイロ、マヌエル・コンシエンディア、ジョアン・ダ・グアルラ、アントニオ・デ・アタイデ、ディアゴ・クラド、それに同志マヌエル・ドス・サントスの肖像であって、これらの方々は優れた文筆と徳操で著名である。

マヌエル・ディオゴ・ヴェルネイ神父は、清浄な木彫りを収める大きな壁龕を造るよう指示され、そこには外枠と装飾、さらには黄金で房べりされたタマスコ織りの幕も付せられた。この方は司祭任命権をも誠実に果たされた。激震で倒壊した回廊へも火の手は拡がり、控訴院ジョアン・デ・アブレウ裁判官から修道会に寄贈されたキリスト十字架像の板絵を焼いた。多年ここに来駕された彼は、控訴院裁判官の職務を終生果されとともに、大学において文学と道德を講じておられる。同じく火焰は他の板絵とともに幼な子を抱いた聖母像を焼尽する。その聖母像は敬愛する私の同窓ヘンリク・コレア神父が所有したもので、彼はローマで歿し、埋葬された同僚マノエル・アルメイダ神父と同じく、上司の指令でそこに派遣され、ポルトガルへの帰途窮乏のため逝去したのである。ディアゴ・ヴェルネイ神父がその形見を回廊に祀った。そこに相応しく、高位聖職者フランシスコ・マノエル神父が購入された大きな掛時計もやはり燃えた。

祈祷室への回廊は前述のとおりディアゴ・ヴェルネイ神父の指示で整備され、その礼拝堂はヘンリック・コレア神父がローマで求めた聖遺物の神殿をなし、華麗な絵図で飾られていたが、地震のためすべて倒壊し、回廊の壁面の図像や地下の宝物が延焼によって一切失われた。神父たちの居室に置かれた物品もみな火焰を避けえなかった。

高位聖職者フランシスコ・マノエル様の裁可に合格するよう、ラテン語の講義が回廊の土間でしばなされた。広大な空間であって、マノエル・アントニオ・ペレイラ神父は二百人の修学生に修道会の輝かしい栄光や創始者の偉大で傑出した功績について教えた。

講堂では穹窿の片側を支え大理石の拱門があり、地震によって講堂と食堂へ崩れ、回廊下の全居室を破壊した。このとき持ち堪えたのは、講堂の外壁と障壁の間に設けられた準備室のみである。①

こうしたポルタルの記述のなかで、とくに印象に残るのは、回廊の意義と構造である。修道院における、建築史家ブラウンフェルスはクリュニー会ペトルス・ウエラビリス修道院を分析して、回廊の重要性についてつぎのように述べる。一二世紀ブルゴーニュに造営されたこの建物では、世界解釈・救済解釈を表現する彫刻に、聖堂と回廊が飾られていた。回廊の壁柱に十二使徒が浮彫にされ、円柱の柱頭には、新約・旧約聖書の事蹟が刻まれる。こうした厳粛で華麗な回廊が指導と省察の場となり、クリュニーを先駆として修道院建築の第一主題となった、と。② 五世紀のち聖霊修道院においても回廊が、十字架像、聖母マリア像、守護聖人像、さらにはさまざま

① Portal, *op.cit.*, pp.618-619.

② ブラウンフェルス著、前掲、一一一一―一一四頁。

まな壁龕^{へきがん}や板絵や陶板で飾られ、その土間で修学生への講義もなされたことが、ポルタルの記録によって知られる。なお、おそらく丘陵の斜面を活かして、この修道院では上下に回廊が配された。二層の回廊は聖堂、祈祷堂、僧坊、食堂等への往来を至便にするとともに、複雑な建築構造へと導き、ひいては地震の被害を拡大したと思われる。古来丘陵に位置する修道院も、多くは頂上の平地に築かれているが、アッシジのサン・フランシスコ修道院は山腹の急斜面に建設され、入り組んだ通路や中庭が絵画的な印象を与えるとされる。③

これらの施設には種々の書類や保管物、さらには貴重な聖体顕示器が収められ、救出のため死の危険と孤立の事態を身を曝すことになる。燃えさかる火焰にすべてが焼き尽くされた。いま述べた聖体顕示器、保管物、あらゆる書類と供託の金貨・銀貨を収めた鉄製の金庫もそこに含まれるが、一層深刻な打撃として文物収蔵所が壊滅し、土地契約書、公正証書、建物所有証、聖具納室と礼拝堂の所蔵目録、修道会に関する無数の書類、きわめて重要な文書の稿本、修道会の全議事録、必需品の供給記録、ローマ教皇の書簡、歴史遺産、発見遺物、修道会独自のあらゆる褒章が焼尽したのである。同じく火焰は新回廊下の建物すべて、さらには古修道院の穹窿と主壁を焼いた。地震によるこれらの被害は窓、出口、床などに止まり、居住者も逃れえたのである。彼らが払う家賃は、修道会にとって毎年三千クルドの収入になっていた。広大な施設と大勢の居住者を擁する修道院のあらゆる食糧、小麦、オリブ油、ブドウ酒、野菜、米などすべてが、厨房と貯蔵室への延焼によって失われた。高価ではないが、精巧に作られたすべての錫製品、銅食器、敷物も食堂のすべての設備とともに同じく焼けた。かくして八つのガラス窓と大きな石造りの穹窿を備えた食堂、さほど大きくはないが、彩色陶板を組んだ石造りの穹窿と六つのガラス窓を備えた軒続きの祈祷室が燃え尽きた。一言で表現すれば、私たちの罪過のため、この修道院全体が地震によって倒壊し、火焰によって壊滅したのである。

本修道会はジョゼ・ピント神父から二万クルザドで若干の建物を購入したが、その手数料一万三千レイをも、さきに述べた年収三千クルザドとは別に失った。以上のほか多くの家財が焼尽したり、破損したり、埋没した。

ネセシダスの修道院では七棟の建物も焼け、収益の大きな損失となったが、火災による大規模な破壊は免れた。私たちの罪過を寛恕された神に、衷心から感謝を捧げる。①

初出 二〇一四年九月二七日

更新 二〇二一年八月十日

③ 同書、二一六―二一七頁。

① Portal, *op.cit.*, pp.619-620.